

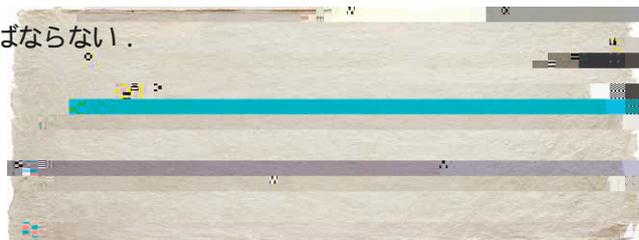
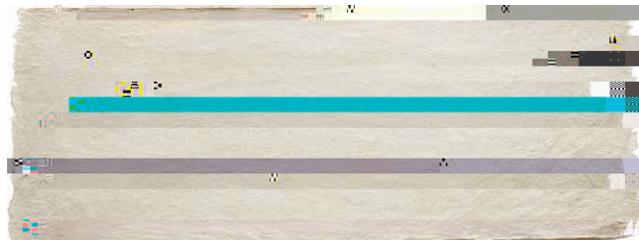
『IHI 技報』の前身の『石川島技報』が創刊されたのは
れて『石川島播磨技報』となり、2007年に
報』に改称された。技報にはこれまでの技術の変
されているが、そこには先人たちの思いも詰まっ
企業人として社会のため、会社のために貢献する
すべきなのか、戦中・戦後はなすすべもないとい
あったらう。それでも前を向いて進んでいった
言葉は、いまを生きる我々にも響いてくる。
年8月15日に日本は終戦を迎えた。焼野原から
直す。それは想像を絶する困難な道のりだったの
か。鉱工業指数

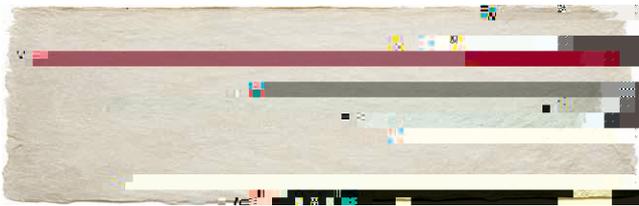
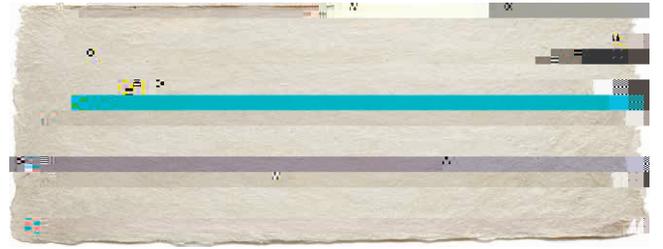
* は、1940年が100.2であった
のに対して、1945年は44.6、さらに1946年には18.0
まで落ち込んでいたという。この期間に、産業の中心は織
維などの軽工業から重工業へと変わり、戦後復興（GHQ）
期といえるときだった。『石川島技報』9巻27号に書か
れた「重工業と研究」という記事がある。石川島重工業
株式会社の社長（当時）だった土光敏夫氏によるものだ。

敗戦による虚脱状態を漸く脱した日本重工業は、
輝かしい再建への途を歩んでいる。

1950 6月競争に十分にたえ得るだけの基礎をきずいておかなければならない。

また、戦後アメリカを視察した人々の言によれば、アメ
リカと日本の技術レベル、事業規模の格差は大きく、戦争
による日本の重工業の空白時代の影響は極めて大きいと土
光氏は悔しさをにじませつつも戦 後を代鉢。





このほかにも、前ページの記事と同時代に刊行された技報には技術開発、研究の必要性を述べている記事が多くみられる。土光氏以外にも各専門家がそれぞれの立場から語った貴重な意見が記されているので、以下に紹介する。

IHI 技報をご覧頂きありがとうございます。
是非、関連する他の記事・論文もご一読ください。

IHI 技報 WEB サイト

Vol. 61 No. 3 特集 産業インフラの^柔蠕 団^々歡 煥指 向 嬰

00
